

発掘された高度経済成長期の消費生活

櫻井 準也

Excavated Consumption Habits of the Japanese High Economic Growth Period

SAKURAI, Junya

Abstract

In this paper, I introduce the life goods discarded into the garbage pit of the rapid economic growth period in Yokosuka-city, Kanagawa prefecture. Various materials, such as pottery, glassware, metal goods, and plastic article, are used for the discarded life goods. and if it totals for every kind, medicine, daily necessities, seasonings, and cosmetics are over 10% of the whole rate, and it reflects everyday life of those days. As a result of investigation, it became clear that these life goods were consumed in the dormitory of the city bank, and the discarded age was middle of the 1960s. Furthermore, the feature of these materials also understood reflecting the consumption habits of dormitory by comparison with the materials of ordinary home of the period. These materials serve as a key which knows the actual condition of the everyday life of the high economic growth period of Japan.

要約

本稿では神奈川県横須賀市で発掘された高度経済成長期のゴミ穴に廃棄された生活財について紹介する。廃棄された生活財には陶磁器、ガラス製品、金属製品、プラスチック製品など様々な素材が使用されており、その種類では薬品、日用品、調味料、化粧品が全体の10%を超え、当時の日常生活を反映するものである。調査の結果、これらの生活財は都市銀行の寮で消費されたものが廃棄されたものであり、廃棄年代は1960年代中頃であることが判明した。さらに、同時期の一般家庭の資料との比較によって、この資料の性格が行員寮における消費生活を反映していることもわかった。この資料はわが国の高度経済成長期の日常生活の実態を知る手掛かりとなるものである。

キーワード

高度経済成長期 (high economic growth period)

生活財 (life goods) / 発掘調査 (archaeological excavation)
近現代考古学 (archaeology of the late modern period)

はじめに

わが国では、縄文時代などを研究対象とする先史考古学に対して文献史料の存在が一般化する古代以降の遺跡を研究対象とする分野を歴史考古学と呼んでいる。そして、国衙や国分寺などの寺院跡を研究する歴史考古学は戦前から存在したが、1960年代になると中世を研究対象とする中世考古学、さらには1970年代頃から江戸遺跡を中心として近世を研究対象とする近世考古学が盛んになった。このうち近世考古学は1980年代の「江戸ブーム」や都内を中心とした都市部の再開発に伴う発掘調査事例の増加によって市民権を得ることができた。これに対し、主に明治時代以降を研究対象とする近現代考古学は、1990年代半ばにその枠組みが示され、その後一時的な盛り上がりを見せたが1998（平成10）年の文化庁通達によって近・現代の遺跡については「地域にとって特に重要な遺跡」以外は調査対象となくなってきた影響もあり、2000年以降は調査・報告事例が減少し現在に至っている。しかしながら、近・現代の遺跡や遺物の多くが「埋蔵文化財」と認定されなくなったものの過去の社会や生活を物語る「考古資料」としての価値は変わっていない。むしろ、通常の発掘調査によって出土した近現代遺物がある場で廃棄される現状においては、近現代考古学の理解者によって発掘調査報告書等に掲載された近現代遺物の価値は高まっている。その中でもわが国の高度経済成長期の発掘資料はさらに貴重な存在であり、本稿がわが国における近現代考古学の必要性を高めることに寄与できれば幸いである。

1. 高度経済成長期と考古学

1.1 高度経済成長期と生活財

わが国では1955（昭和30）年から1973（昭和48）年のオイルショックまでを高度経済成長期と呼んでいる⁽¹⁾。高度経済成長期の実質年平均経済成長率は10%を超えてGNP（国民総生産）で先進諸国を次々と追い抜き1968（昭和43）年には当時の西ドイツを抜いて世界第2位となった。こうした背景には、1ドル360円の固定相場による輸出の増加、わが国の技術革新や企業の積極的な設備投資、安価で質の高い労働力の獲得、国民の所得水準の上昇などがあったとされている。これに対し、近・現代のわが国の国民の生活について「生活水準」という観点から当時の生

(1) 松田延一によると、昭和30（1955）年～昭和35（1960）年を高度成長準備期、昭和36（1961）年～昭和40（1965）年を高度経済成長前期、昭和41（1966）年～昭和48（1973）年を高度経済成長後期として区分される（松田1985）。また、景気という観点から1955（昭和30）年から1957（昭和32）年までを「神武景気」、1958（昭和33）年から1961（昭和36）年までを「岩戸景気」、1965（昭和40）年から1970（昭和45）年までを「いざなぎ景気」を呼んでいるが、東京オリンピックが開催された1964（昭和39）年を「オリンピック景気」と呼ぶこともある。

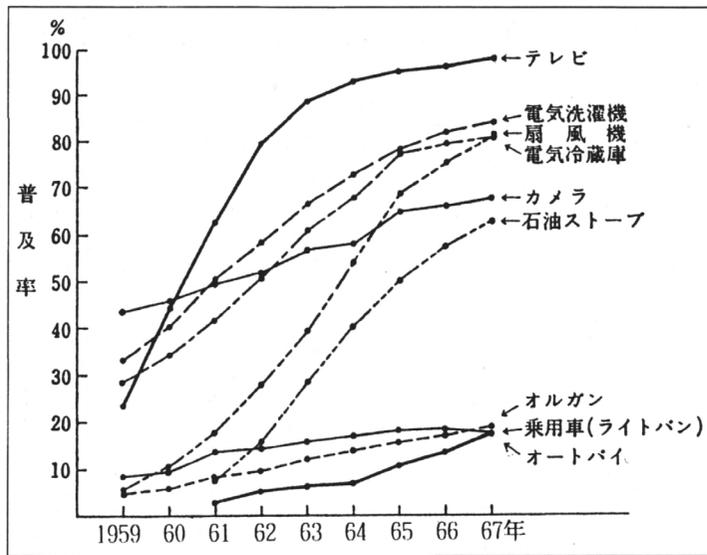
活実態がいかなるものであったか具体的な指標を用いて記述した試みとして総合研究開発機構による報告『生活水準の歴史的分析』（総合研究開発機構 1988）がある。この報告の中には対象を生活財や生活関連サービスに絞って明治時代以降の変遷について検討した部分があるが、そこでは生活史年表に登場する記事の整理・分析から明治期以降の生活財や生活関連サービスの変遷を次の5期に区分している。

第1期は明治初期から1887（明治20）年頃までで、各種の財・サービスが輸入・紹介された導入・試作期にあたる。この時期には多く生活財が欧米から導入された時期であり、衣食中心に新しい商品が続々と紹介・導入されたが、一般家庭への普及という点では東京・横浜などの一部の都市生活者に限定されていた。第2期は1887（明治20）年頃から明治期末までで、国内製造に成功し本格的に販売がなされ、商品が家庭に浸透した時期で製造・販売期にあたる。また、機械製品の紹介・導入が盛んになり、生活の西洋化が消費全体に及んだ時期であり、流通の近代化が進み都市化にともなってサービス業が成立した時期でもある。第3期は大正期初頭から1935（昭和10）年頃までで、都市部における卸小売の近代化を背景に急速に商品経済が拡大する普及期にあたる。この時期には現代の消費生活の原型がつくられた時期である。第4期は1935（昭和10）年頃から敗戦をはさんで1950（昭和25）年頃までの時期で戦争によって消費水準が低落した戦時・戦後期である。第5期は昭和20年代後半以降の商品経済、消費社会の完成期であるが、家庭電化という観点からこの時期はさらに三期に区分されている。第1次電化期は昭和30年代で電気洗濯機、電気冷蔵庫、白黒テレビが「三種の神器」と呼ばれた時期、第2次電化期は昭和40年代でカラーテレビ、クーラー、マイカーが「3C」と呼ばれた時期、第3次電化期は昭和50年以降のエレクトロニクス時代とされている。このように、大量生産・消費社会が到来した高度経済成長期を特徴づける事項として一般家庭に電化製品が普及したことがあげられているが（図1）、その背景には個人所得の増大に伴って消費支出中の食料費の構成比率（エンゲル係数）が減少し、家電製品を含む耐久消費財への支出が増大したことがあげられる。このようにわが国の高度経済成長期においてはモノが「豊かさ」の象徴であり、わが国に様々な商品を大量に消費し、廃棄する時代が到来したのである。

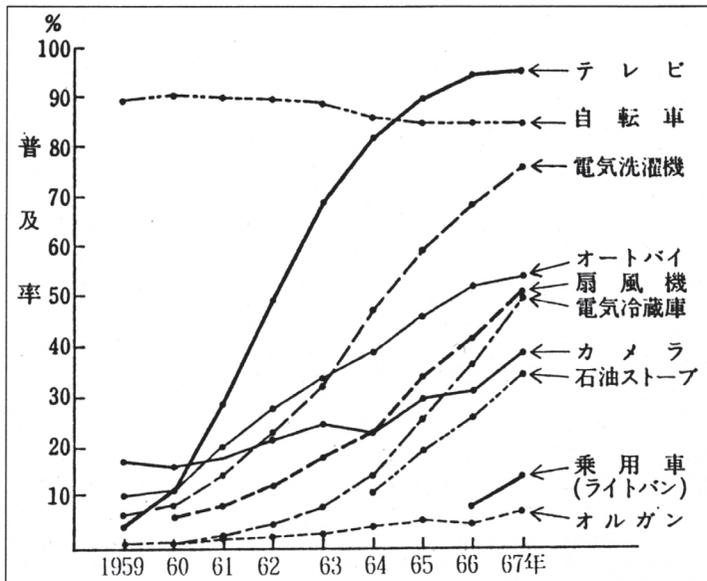
1.2 高度経済成長の考古学

考古学の研究対象は旧石器時代から現代に至る様々な時代や地域に及ぶが、考古学は主に物質文化研究（モノ研究）の手法を用いて過去の文化や社会に関する研究を実践する学問分野である。また、考古学は文献史料の存在しない時代を対象とする先史考古学と文献史料が存在する時代を対象とする歴史考古学に区分されるが、歴史考古学の中でも対象とする時代が古代・中世・近世・近現代によって文献史料の量や質はまったく異なる。特に本稿で取り上げる近現代については文献史料の量が膨大であるだけでなく、写真資料や映像資料など扱う資料が多岐にわたり、関係者への聞き取り調査も可能である。これに対して発掘調査によって出土する遺物は当時使用された生活財の一部に過ぎないため発掘資料から当時の生活について知ることには限界があると考えることは当然である。しかしながら、わが国の高度経済成長期について語る場合には、文献史料などの情報量が膨大であるがゆえに個々の事例ではなく全体的な傾向を示す統計資料に偏る傾向があることも事実である。その意味で限られた地域や家族あるいは個人の生活実態について

◇人口5万以上都市



◇農家



(出所) 経済企画庁「消費と貯蓄の動向」(昭和42年)

図1 主要耐久消費財の普及の推移 (吉川1997)

知るために、彼らが残したゴミ穴等の発掘資料を用いることは有効な手段となるのである。また、これらの発掘資料には地域差や階層差だけでなく個人の嗜好やライフスタイルが反映される点も見逃せない(櫻井2007)。さらに、考古学は時代の変化を物質資料を用いて実証的に捉えることを得意とするが、わが国の高度経済成長期の前後で変化した生活財の特徴として使用される素材の変化があげられる⁽²⁾。このように遺跡から検出される高度経済成長期のゴミ穴は21世紀

に暮らす我々にとって50年前に埋められた「タイムカプセル」のような存在であり、出土した資料から当時の人々の日常生活が蘇ってくるのである。

2. 発掘された高度経済成長期の遺跡

2.1 遺跡の概要

本稿で紹介する神奈川県横須賀市長岡南遺跡は横須賀市長沢2丁目に所在する。遺跡は三浦半島の南東部の金田湾に面した標高15m前後の砂丘上に立地しており、蛇行する長沢川に三方が囲まれた舌状地形上にあたる。また、遺跡は京浜急行電鉄長沢駅の東方約300m、現在の海岸線の北西方向約230mの位置にあたる（京浜急行電鉄の京急長沢駅から京急久里浜駅までは5分程度、京急横須賀中央駅までは15分程度である）。本遺跡は宅地造成のため2008（平成20）年に946m²にわたって発掘調査が実施され、調査の結果弥生時代中期～古墳時代の竪穴住居跡8軒・ピット13基、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒、中・近世の土坑群が検出されている（吾妻考古学研究所2012）。また、長沢川に近い調査区西端から径2mで覆土の厚さ30cm程度のゴミ穴（廃棄土坑）が検出され（図2、写真1）、覆土中から戦後の陶磁器・ガラス製品・金属製品などがまとめて出土している。なお、文献調査の結果、1961（昭和36）年の『住宅明細地図』に本調査区の西側部分に大手都市銀行の寮（「久里浜寮」）が掲載されていることから、本ゴミ穴は戦後この寮から出た不燃ゴミを廃棄する目的で掘られたものであると推測される。

2.2 ゴミ穴の出土遺物と廃棄年代

長岡南遺跡のゴミ穴からは合計323点の遺物（生活財）が出土している⁽³⁾。出土した生活財に使用されている素材としては陶磁器、ガラス、木、金属（鉄製・琺瑯製・アルミ製）、プラスチック、ビニール、そして複数素材があるが、全体に占める割合が高い順ではガラスが64.4%と過半数を占め、次いでプラスチックが11.8%、鉄が11.5%、陶磁器が9.0%と比較的高い割合を占めている（図3）。このように、使用されている素材は様々であるが、容器として使用されたガラス瓶が多く出土していること、近世以来使用されている鉄や銅といった金属素材だけでなく琺瑯鉄器やアルミニウムなど戦後になって普及するようになった新たな素材が使用されている点の特徴である。また、同様に高度経済成長期から急激に増えたとされる石油系プラスチック製品も一定量含まれているが、現在の使用状況と比較すると全体に占める割合はそれほど高くはないことが

(2) 近代の台所用具の変遷をまとめた古島敏雄によると、金属製品ではかつては主に素材として鉄が用いられていた鍋や釜は、琺瑯鉄器やアルミニウム、アルマイト、ステンレス・スチールへ素材が変化している（古島1996）。このうち、琺瑯鉄器は流し台・ガス台・電気冷蔵庫等の台所用具に用いられ、アルマイトは弁当箱として昭和30年代に広く使用され、ステンレス・スチールも高度経済成長期から一般家庭に普及している。また、多くの合成樹脂を含むプラスチック類の中で玩具等に使用されたセルロイドは1905（明治38）年、汁椀や重箱等に使用されたベークライトは1915（大正4）年に製造が開始されている。さらに、現在至るところで使用されているプラスチック製品は戦後の石油化学工業の発達により、1955（昭和30）年頃から普及するようになった。

(3) 本遺跡のゴミ穴出土遺物は現在、本学で保管しており「博物館実習」や「考古学」などの授業に活用している。

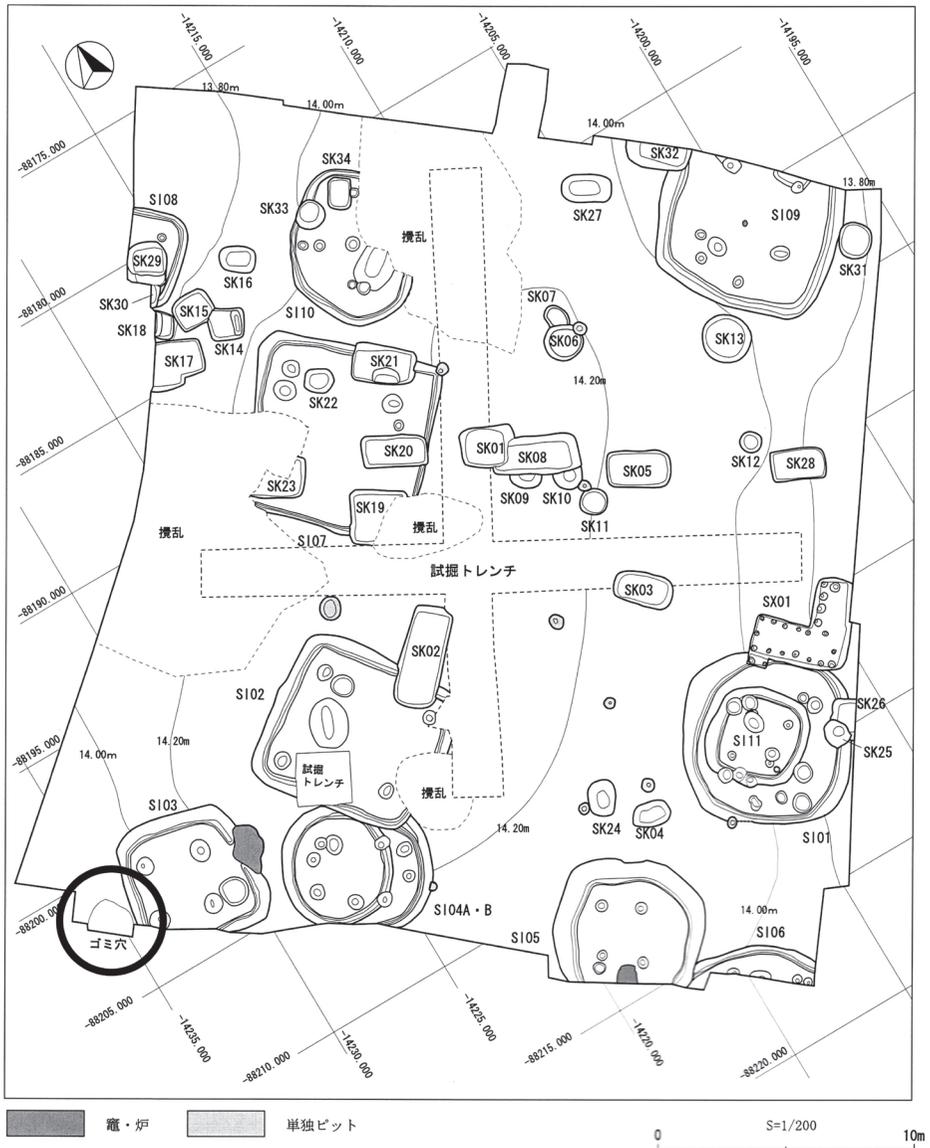


図2 長岡南遺跡の調査区とゴミ穴の位置（吾妻考古学研究所2012、第6図を改変）

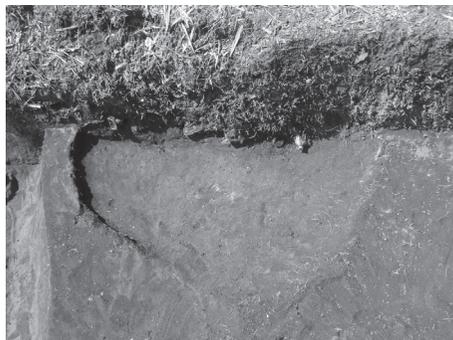


写真1 長岡南遺跡ゴミ穴の検出状況

わかる。

次に、出土した生活財の種類別区分では、全体に占める割合の高い順に薬品が21.4%、日用品が15.5%、調味料が14.9%、化粧品が10.2%、電気器具が7.4%、食品が7.1%、食器・食品容器が7.1%、清涼飲料が5.0%、アルコール飲料が3.7%などとなっている（図4）。各種類ごとにその細目をみていると実に多様な食品や生活財が含まれていることがわかる。具体的には、アルコール飲料としてビール・ワイン・日本酒・焼酎・ウイスキー、清涼飲料としてジュース・炭酸飲料・濃縮乳性飲料・薬用清涼飲料、乳飲料として牛乳、嗜好飲料としてインスタントコーヒー、調味料として食塩・コショウ・醤油・ソース・ケチャップ・マヨネーズ・味の素・酢・味醂、食品として食用油脂・漬物や佃煮・ヨーグルト・ドロップ・カップアイス・ベビーフード、薬品として医療用薬品・一般用薬品・軟膏・目薬・湿布剤・アンプル、化粧品として整髪料・化粧水・化粧クリーム・ヘアトニック・香水・香油・口紅・マニキュア・除光液、食器・食品容器として湯飲み・コップ・椀・鉢・小鉢・なます皿・小皿・洋皿・コーヒーカップ・ソーサー、日用品として建水・茶漉し・石鹸箱・歯ブラシ・シャンプー・リンス・ヘアブラシ・ヘアカーラー・洗剤・染

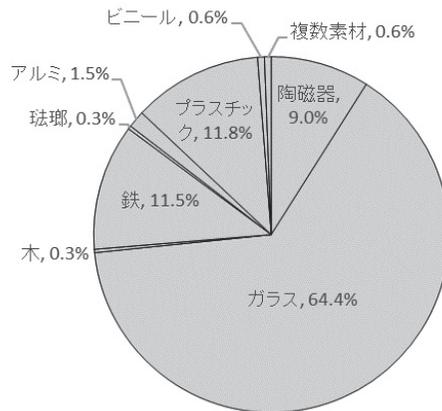


図3 長岡南遺跡のゴミ穴出土遺物組成（素材別）

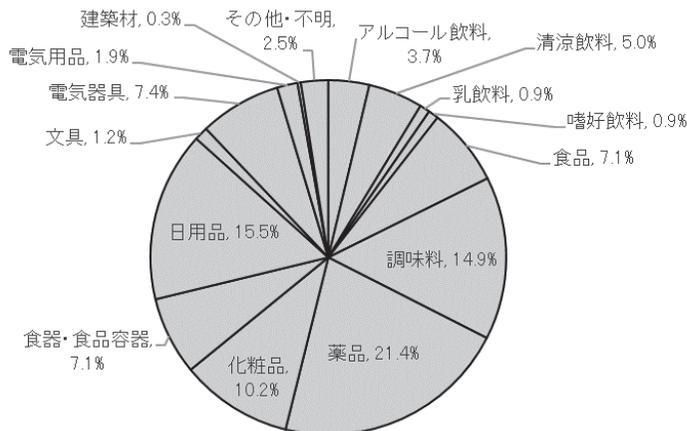


図4 長岡南遺跡のゴミ穴出土遺物組成（種類別）

み抜き剤・ベンジン・染料・蛍光塗料・殺虫剤・機械油・自動車洗剤・花瓶・置き時計・温度計・シガレットケース・ビニール傘・草履・スリッパ・ビーチサンダル・靴墨、文具としてインク・墨汁、電気器具として電気行火・電球・真空管・乾電池、電気用品としてスイッチ・コンセント・ソケット・碍子、建築材としてタイル、その他としてタグ（「昭和35年度 第1回注射祭 第5853号 横須賀市」）やビニール袋である（写真2～24）。

また、これらの食品や生活財の中で商品名や発売メーカーが判明したものは以下の通りである（カッコ内は出土数）。

アルコール飲料

寿屋（現サントリー）の「赤玉ポートワイン」（3）・「赤玉ホワイトワイン」（2）、大関酒造の「大関」（1）、野田醤油の「合成清酒 四方の春」（1）、宝酒造の「宝焼酎」（2）、寿屋（現サントリー）の「トリスウイスキー」（1）、大黒葡萄酒の「オーシャンウイスキー」（1）

清涼飲料

森永乳業の「フレッシュジュース」（1）、明治屋の「グレープジュース」（1）、明治乳業のジュース（1）、コカ・コーラ社の「ファンタ」（6）、「カルピス」（徳用瓶2・小瓶1）、森永製菓の「コーラス」（1）、大正製菓の「リポビタミンD」（1）

乳飲料

明治乳業の「明治牛乳」（1）



写真2 ゴミ穴出土物（アルコール飲料）



写真3 ゴミ穴出土物（清涼飲料1）



写真4 ゴミ穴出土遺物（清涼飲料2）



写真5 ゴミ穴出土遺物（乳飲料・食品）

嗜好飲料

ネスレの「ネスカフェインスタントコーヒー」(3)

調味料

専売公社の「食卓塩」(5)、エスビー食品の「S&B コショウ」(6)、山泉商会の「ヤマイズミ」(醤油)(1)、ブルドックソース株式会社の「ブルドックソース」(1)、「チキンソース」(1)、カゴメの「カゴメケチャップ」(6)、キューピーの「キューピーマヨネーズ」(10)、「味の素」(2)、宝酒造の「寶味酛」(8)、相生味酛株式会社の「相生味酛」(3)

食品

日清食品の「日清サラダオイル」(2)・「ごま油」(1)、豊年製油の「豊年スーパーサラダオ



写真6 ゴミ穴出土遺物 (調味料・食品)



写真7 ゴミ穴出土遺物 (嗜好飲料・調味料・食品)



写真8 ゴミ穴出土遺物 (薬品1)



写真9 ゴミ穴出土遺物 (薬品2)



写真10 ゴミ穴出土遺物 (薬品3)



写真11 ゴミ穴出土遺物 (薬品4)

イル」(3)、桃屋の「江戸むらさき」(3)、森永乳業の「森永ヨーグルト」(2)、不二家の「フルーツドロップ」(1)、和光堂のベビーフード(1)

薬品

グレラン製薬の「新グレラン錠」(3)、塩野義製薬の「セデス」(1)、三共製薬の「三共胃腸薬」(1)、ビオフェルミン製薬の「ビオフェルミン」(4)、武田製薬の「アリナミン」(8)、小野薬品の錠剤薬(1)、イチジク製薬の「イチジク浣腸」(1)、武田製薬の「ハイシー」(1)、ユースキン製薬の「ユースキン」(1)、「メンソレータム」(2)、「プロギノン軟膏」(1)、参天製薬の「スーパーサンテン」(1)



写真12 ゴミ穴出土遺物(化粧品1)



写真13 ゴミ穴出土遺物(化粧品2)



写真14 ゴミ穴出土遺物(化粧品3)



写真15 ゴミ穴出土遺物(食器1)



写真16 ゴミ穴出土遺物(食器2)



写真17 ゴミ穴出土遺物(日用品1)

化粧品

三共の整髪料 (1)、ケンシ精香の「ケンシセットローション」(2)、アソカの「アソカセットローション」(1)、ヘチマコロンの「ヘチマコロン」(1)、パピリオ化粧品の「NOURRIR」(1)、オルガン化粧品の化粧水 (1)、資生堂の化粧クリーム (2)、クラブ化粧品の化粧クリーム (1)、ウテナの化粧クリーム (1)、ラネヤの化粧クリーム (1)、ウテナのコールドクリーム (1)、ライオンのヘアトニック (1)、井筒屋商店の「井筒エメロード」(香油) (1)、資生堂の「ゾートス」(口紅) (1)、オペラ化粧品のマニキュア (1)、オペラ化粧品の「ネイルエナメルリムーバー」(除光液) (1)

食器・食品容器

「Nagase China」のソーサー(1)、アンカーホッキングの食品容器 (2)

日用品

牛乳石鹼共進社の「牛乳シャンプー」(1)、資生堂の「ゾートス」(シャンプー) (1)、日本製薬販売の「プラスマンレモンクリームリンス」(2)、メヌマのリンス (1)、ライオン油脂の「ライポンF」(洗剤) (1)、第一製薬の「レスポン」(洗剤) (4)、タカビシ化学の「エリモト」(染み抜き剤) (1)、桂屋の「みやこ染」(1)、桂産業の染料 (1)、白元の蛍光塗料 (1)、アース製薬の「アース」(殺虫剤) (1)、「アース エアゾール」(殺虫剤) (1)、サンケイ化学の「アマメックス エアゾール」(殺虫剤) (1)、ナガオカ販売の「インプレス」(殺虫剤) (2)、中外製薬の「バルサン」(殺虫剤) (2)、コロンブスの靴墨 (1)



写真18 ゴミ穴出土遺物 (日用品2)



写真19 ゴミ穴出土遺物 (日用品3)



写真20 ゴミ穴出土遺物 (日用品4)



写真21 ゴミ穴出土遺物 (日用品5)



写真22 ゴミ穴出土遺物（日用品6・文具）



写真23 ゴミ穴出土遺物（電気器具）

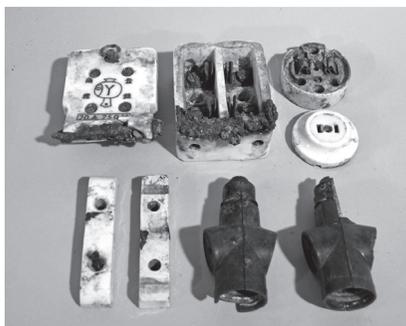


写真24 ゴミ穴出土遺物（電気用具）

文 具

パイロットのインク（3）、トンボ鉛筆の墨汁（1）

電気器具

マツダの電球（3）、ナショナルの電球（2）、カザミの電球（1）、ナショナルの乾電池（1）

電気用品

岩松製造のスイッチ（2）、ナショナルのソケット（2）、ヤチヲのソケット（1）

これらの出土遺物を銀行の行員寮で消費された生活財であるという前提で考えると、まず鍋などの調理具が出土しておらず食器が少ない点や食塩・コショウ・醤油・ソース・ケチャップ・マヨネーズなどの調味料が非常に多い点が指摘できる。また、様々な女性用化粧品やヘアカラーなどの化粧道具、女性用の草履やビニール傘などが出土していることから女性行員が複数含まれていたことが想像できる。ただし、ベビーフードの存在から必ずしも独身寮とは言いきれない（子ども用の生活財や玩具は出土していない）。これに対し、嗜好品としてワイン・ウイスキー・焼酎などのアルコール飲料やジュース・「ファンタ」・「カルピス」・インスタントコーヒーなどの清涼飲料が多く出土しており、若い行員が寮の中心であったことが窺える。さらに、日常生活に関わる遺物として、石鹸箱、歯ブラシ、シャンプー、リンス、台所用洗剤など多様な生活財が出土しているが、なかでも殺虫剤が多く出土している点は現在とは住環境や生活環境が異なることを想像させる。薬品については、医療用薬品は少なく薬局で購入できる一般用薬品として鎮痛剤

(ピリン系)・胃腸薬・整腸剤・ビタミン剤、軟膏、目薬、湿布剤などが出土しているが、ビタミンB補給のビタミン剤である「アリナミン」(糖衣錠)の容器が多く出土している点は高度経済成長期の生活を彷彿とさせるものである。

次に、本ゴミ穴が掘削され出土遺物が廃棄された年代について検討してみたい。出土遺物の廃棄年代を推定するためには、ガラス瓶容器に陽刻されている瓶の製造年代を検討することが最も有効な廃棄年代の決定法であるが、その他に商品の発売期間を調査することにより廃棄年代を推定することもできる。まず、本ゴミ穴から出土したガラス瓶の陽刻(エンボス)に表示されている瓶の製造年は、1958(昭和33)年(「ファンタ」、「カゴメケチャップ」)、1959(昭和34)年(「カゴメケチャップ」)、1960(昭和35)年(「カゴメケチャップ」、「森永ヨーグルト」)、1961(昭和36)年(「ファンタ」、「森永ヨーグルト」、「カゴメケチャップ」)、1963(昭和38)年(「ファンタ」、「リポビタミンD」)、1964(昭和39)年(「ファンタ」)である。このことからガラス瓶が製造された年に購入・消費され廃棄されたとすれば、最も新しい年代である1964(昭和39)年に遺物が廃棄されたということになる。しかし、空容器がしばらく納戸や倉庫に収納されていた可能性やガラス瓶が回収されてリサイクルされる期間が数年間であるとする本ゴミ穴の廃棄年代は1964(昭和39)年から1966(昭和41)年頃ということになる。

さらに出土遺物(商品)の販売期間について検討すると、1950年代後半から1960年代に発売が開始された商品として、1957(昭和32)年の「三共胃腸薬」、ユースキン製薬の「ユースキン」、日本製薬販売の「プラスマンレモンクリームリンス」、「カゴメケチャップ」(広口瓶)、「キューピーマヨネーズ」(社名変更)、1958(昭和33)年の「ファンタ」、牛乳石鹸の「牛乳シャンプー」、1959(昭和34)年の野田醤油の「相生味醂」、ライオン油脂の「ライボンF」、1961(昭和36)年の第一製薬の「レスポン」、武田製薬の「ハイシー」、1962(昭和37)年の大正製薬の「リポビタミンD」がある。これに対し、発売終了年が判明した資料としては、1964(昭和39)年に終了した野田醤油の「四方の春」、1966(昭和41)年に「新ビオフェルミン」が発売された「ビオフェルミン」がある。これらを総合すると遺物の廃棄年代は1962(昭和37)年以降1964年(昭和39)年あるいは1966年(昭和41)年以前ということになり、ガラス瓶の陽刻(エンボス)から推測された1964(昭和39)年～1966(昭和41)年頃という年代とほぼ合致することがわかる。そこで本稿では本ゴミ穴の廃棄年代を1964(昭和39)年～1966(昭和41)年頃と推測しておきたい。なお、1970(昭和45)年に「廃棄物の処理および清掃に関する法律」(廃棄物処理法)が公布されたが、横須賀市では1972(昭和47)年11月20日に「不燃物の一部(金属類)の再資源化の前処理として横須賀市鉄化石(株)に圧縮処理を代行させた」(横須賀市生活環境事業部1989)とあるように、瓶や缶などの資源ごみが回収され再資源化システムが確立したのは1970年代以降と考えられる。

2.3 同時期のゴミ穴出土遺物との比較

ここでは比較資料として同じ高度経済成長期の都市近郊農村の発掘調査事例であり、筆者も発掘調査に参加した神奈川県藤沢市南葛野遺跡のゴミ穴の事例を紹介する(南葛野遺跡発掘調査団1995、櫻井1997・2004)。南葛野遺跡は藤沢市北部の葛野地区に所在する。この地域の東側に隣接する藤沢市遠藤地区では昭和30年代以降、大手企業の工場が進出したことや住宅地(湘南ライフタウン)が造成されたことにより地域景観が大きく変容しているが、葛野地区は比較的古くか

らの地域景観が維持されている地域である。以前は耕地であった南葛野遺跡からは発掘調査によって旧石器時代や縄文時代の遺跡が検出されたが、それ以外に小道の脇から高度経済成長期のゴミ穴が検出されている。検出されたゴミ穴は径1.1m、深さ1.1mで覆土から100点ほどの不燃ゴミが出土している。これらの出土遺物は近くの集落の住人が一定期間物置に保管されていた不燃ゴミをリヤカー等で運び、穴を掘って廃棄したものと推定され、廃棄年代については出土遺物から1963（昭和38）年～1969（昭和44）年頃と推定された⁽⁴⁾。

次に、南葛野遺跡のゴミ穴から出土した生活財の素材について検討すると、全体に占める割合の高いものから陶磁器が52.0%、ガラスが25.5%、鉄が13.3%、アルミが5.1%、プラスチックが4.1%となっている（図5）。これを長岡南遺跡の資料と比較すると、陶磁器が過半数を超えていることやガラス製品やプラスチック製品の割合が低いことが指摘できる。また、資料の種類別分類では、全体に占める割合の高い順に食器（飯茶碗が多く、他に湯呑み、皿、鉢、浅鉢、ラーメン丼、コップなど）が53.3%、化粧品（化粧水、養毛剤、化粧クリーム、マニキュア、パフ）と日用品（歯磨き粉、殺虫剤瓶、便器など）がそれぞれ10.9%、次に清涼飲料（サイダー、ジュース、薬用清涼飲料）、乳飲料（牛乳）、食品、農具（鎌、ナタ）がそれぞれ3.3%、アルコール飲料（ビール）、調味料（醤油、味の素）、薬品（薬瓶など）、調理具（鍋）、電気器具（懐中電燈、電球）がそれぞれ2.2%などとなっている（図6）。これらの生活財の内容から若い夫婦と子どもからなる核家族を基本とする一般家庭が想定できるが、その理由として出土量がそれほど多くないこと、食器や日用品の割合が高いこと、女性用化粧品が出土していること、小児科の薬瓶が存在していることなどがあげられる。なお、出土した生活財の中で商品名や発売メーカー名が判明したものとして、「HINO CHINA」の洋皿、「キリンビール」、「三ツ矢サイダー」、大正製薬の「リポビタミンD」、森永乳業・明治乳業の牛乳、キッコーマンの醤油、「味の素」、資生堂の化粧品「ドルックスシリーズ」、加美乃素本舗の化粧水、マックスファクターのパフ、「フマキラー」（殺虫剤）があげられる。

このように、同じ1960年代に廃棄されたと推定される南葛野遺跡の資料と既に紹介した長岡南遺跡の資料を比較すると両者に違いがみられることがわかる。その背景として長岡南遺跡の場合は大手都市銀行の寮、南葛野遺跡の場合は都市近郊農村に暮らす一般家庭の不燃ごみであることがあげられるが、居住者については長岡南遺跡の場合は年齢や性別の構成は不明ではあるものの比較的若い独身の行員、南葛野遺跡の場合は若い夫婦と子どもからなる核家族が想定できる。具体的に両遺跡の出土資料について検討すると、ともに多様な日用品が出土している点は共通しているが、南葛野遺跡で食器が過半数を超えている点は通常保有している食器の種類や量が多い一般家庭の廃棄物であることを示している。また、長岡南遺跡に調味料容器が多い点については多くの行員が食事をする寮の特徴を反映していると考えられる。さらに、女性用化粧品については

(4) 具体的には、ガラス瓶の陽刻（エンボス）の年代が1962（昭和37）年、1963（昭和38）年であり、商品の販売期間では「味の素」が1951（昭和26）年～1973（昭和48）年販売、資生堂の「ドルックスシリーズ」が1951（昭和26）年再発表、加美乃素本舗の化粧品とヘアクリームが1955（昭和30）年～1960（昭和35）年販売、シオノギの練り歯磨き粉「グリーンサンスター」が1951（昭和26）年～1958（昭和33）年販売、ライオン油脂の箱形歯磨き粉「スーパーライオン」が1957（昭和32）年、大正製薬の「リポビタミンD」および明治製菓の「メービス」が1962（昭和37）年発売である。

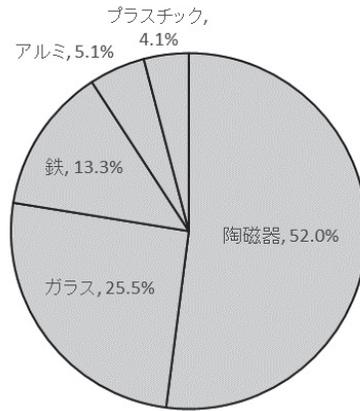


図5 南葛野遺跡のゴミ穴出土遺物組成 (素材別)

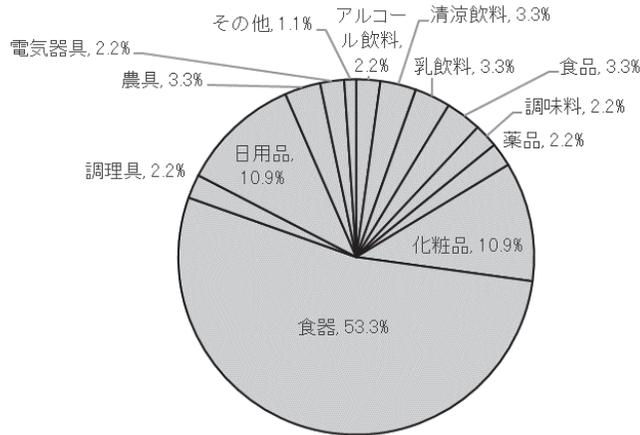


図6 南葛野遺跡のゴミ穴出土遺物組成 (種類別)

南葛野遺跡から化粧水・化粧クリーム・マニキュア・パフが出土しているが、長岡南遺跡からは複数の化粧品メーカーの化粧水や化粧クリーム、さらにはコールドクリーム・香水・口紅・マニキュア・除光液・ヘアカーラーなどが出土しており、複数の若い女性が居住していたことがわかる。嗜好品については南葛野遺跡ではビールなどのアルコール飲料、サイダーやジュースなどの清涼飲料容器が若干出土しているが、長岡南遺跡ではワイン・日本酒・焼酎・ウイスキーなどのアルコール飲料やジュース・「ファンタ」・「カルピス」などの清涼飲料、さらにはインスタントコーヒーの容器が多く出土しており嗜好品の種類も豊富である。このように、居住者の年齢・性別やライフスタイルによって生じる消費活動の差がゴミ穴の廃棄物に反映されることがわかる。

3. 蘇る高度経済成長期の記憶

今回、長岡南遺跡のゴミ穴出土遺物の整理作業を通じて筆者自身が子ども時代に経験した高度経済成長期の記憶が蘇る場面が幾度かあった。例えば、コカ・コーラ社の炭酸清涼飲料「ファン

タ」⁽⁵⁾のガラス瓶がまとまって出土しており当時飲用していたことを思い出したが、わが国における発売年にあたる1958（昭和33）年製造のガラス瓶と1961（昭和36）年および1964（昭和39）年製造のガラス瓶の形状やプリントの位置が異なっていることや後者には前者にはない底部のナーリング（櫻井2006）が存在することは新たな発見であった。また、濃縮乳性飲料の「カルピス」や嗜好飲料の「ネスカフェインスタントコーヒー」は贈答品として使用されていたこと、寿屋（現サントリー）の「赤玉ポートワイン」（酒精強化ワイン）は1971（昭和46）年に酒類の輸入が自由化され翌年に第一次ワインブームが起こる以前はどここの酒店にも置いてあるワインであったことを思い出した。さらに、当時の食卓に並んでいた専売公社の「食卓塩」、「S&B コショウ」、「ブルドックソース」、「カゴメケチャップ」、「キューピーマヨネーズ」、「味の素」などの調味料、「日清サラダオイル」や桃屋の「江戸むらさき」などの食品類、頭痛の際に服用した解熱鎮痛剤「新グレラン錠」やビタミンB錠剤である「アリナミン」、ビタミンC錠剤である「ハイシー」などを使用・服用していたことも記憶している。

これに対し、様々な日用品の中で1961（昭和36）年に発売が開始された第一製薬の台所用洗剤「レスポン」のプラスチック容器は当時の衛生状況を示すという点で注目される資料である。「レスポン」の胴部には「食器・野菜・果物洗浄用 レスポン 液体中性洗剤」、「●水2リットル（約一升）に、レスポン約5ccを溶かし、標準液としてお使いください。（この容器のキャップ一杯は約10cc）●野菜や果物は、この標準液の中によくひたしてから振り洗いし、そのあと水でよくすすいでください。●油でよごれた食器類は、標準液の中に入れ、スポンジやヘチマなどで軽くこすって洗いおとし、清水をそそいで仕上げてください。」、「●野菜や果物洗いに…風味をそこなわず、ビタミンなどの栄養素をこわさず、蛔虫卵・大腸菌・農薬などを完全に洗いおとして、清浄な野菜・果物にします。」といった懇切丁寧な表記がある。すなわち、この洗剤は水に溶かして使用するもので食器類だけでなく野菜や果物も洗う洗剤であり、野菜や果物についての蛔虫卵・大腸菌・農薬を落としていたことがわかる。当時は人糞も肥料として用いていたため、栽培された野菜を生食あるいは漬物にすることによって寄生虫卵が体内に取り込まれて寄生虫が体内で成長していたという高度経済成長期の記憶がゴミ穴から発掘された遺物によって蘇ったのである。

おわりに

大量生産・大量消費の時代であるわが国の高度経済成長期のゴミ穴の発掘調査によって様々な廃棄物が発掘される。その多くは陶磁器・ガラス瓶・金属製品などの不燃物であり、当時の生活財の中でも小形の食器や飲料容器・食品容器・薬品容器・化粧品容器などが主体を占める。こうした廃棄物は当時の消費生活を垣間見ることができる貴重な資料であるが、廃棄されて50年程しか経ていないにも関わらず出土資料に関する調査は意外に難しい。現在ではインターネットを利用して調査することも可能となったが、既に紹介した南葛野遺跡の資料調査は1990年代前半のこ

(5) 「ファンタ」は1940年に第二次世界大戦でアメリカからコカ・コーラの原液を輸入できなかったドイツのコカ・コーラ社が開発した商品である。

とであり、企業の社史などでは求めている情報が得られないため企業に直接問い合わせをすることもあった。しかし、メーカーに当時の商品サンプルがすべて保存されているわけではなく、こちらが知りたい商品のデザイン変更の時期など詳細な情報を必ずしも得ることができなかった。また、多種多様な当時の商品がどの程度流通し、消費されていたかを知ることも難しい。そのような状況の中で大量生産・大量消費の時代であるわが国の高度経済成長期のゴミ穴から発掘される資料は、当時の消費生活の実態を知る契機となる貴重な資料であるといえる。

謝辞

本稿を作成するにあたって吾妻考古学研究所の山田仁和氏、ゼミ生の渡邊宇明君にお世話になりました。記して感謝致します。

参考文献

- 吾妻考古学研究所2012『神奈川県横須賀市長岡南遺跡―発掘調査報告書―』
家庭総合研究会1990『昭和家庭史年表』河出書房新社
久保道正1991『家電製品にみる暮らしの戦後史』ミリオン書房
小菅桂子1997『近代日本食文化年表』雄山閣出版
栗田靖之1977「物質文化から見た現代家庭」『国立民族学博物館研究報告』2巻4号
栗田靖之1978「生活財から見たライフスタイル研究」日本生活学会編『住生活と地域社会』ドメス出版
高度経済成長を考える会編1985～86『高度成長と日本人』日本エディタースクール出版部
国立歴史民俗博物館編2010『高度経済成長と生活革命』
櫻井準也1997「高度経済成長期の考古学―都市近郊農村の事例から―」『民族考古』第4号
櫻井準也2004『モノが語る日本の近現代生活―近現代考古学のすすめ―』慶應義塾大学出版会
櫻井準也2006『ガラス瓶の考古学』六一書房
櫻井準也2007「近現代遺物研究と消費理論」鈴木公雄ゼミナール編『近世・近現代考古学入門』慶應義塾大学出版会
櫻井準也2010「モノから日本の近代生活を探る―階層・ライフスタイル―」国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所『国際常民文化研究機構第2回国際シンポジウム “モノ”語り―民具・物質文化からみる人類文化―』
商品科学研究所1983『生活財生態学Ⅱ』
疋田正博1986「モノから暮らしを見る」中鉢正美編『生活学の方法』ドメス出版
松田延一1985『高度経済成長下の国民生活―高度経済成長下における国民生活の変化―』中部日本教育文化会
南葛野遺跡発掘調査団1995『南葛野遺跡』
横須賀市生活環境事業部1989『清掃事業概要（昭和63年度）』
吉川 洋1997『20世紀の日本6 高度成長』読売新聞社
リポレポート1980『生活財生態学』

